ジャワの座敷童子

宮崎恒二

ジャワ人は alus と kasar という対比語をよく使う。alus は「細やかな，柔い」，kasar は「荒々しい，粗野な」という意味である。たとえば宮廷文化は alus であり，村はすべてにおいて kasar だと言う。

ある晩，番小屋で，S氏と幽霊談義をしていた時，roh（霊）alus という表現が気になった。「roh alus というからには roh kasar もいるのかい？」「ああ，いるとも。お前さんやオレがその roh kasar さ。」まだ肉体とくっついているのが roh kasar なのである。

さて，数多い roh alus の中でも面白いのは，座敷童子 tuyul だ。tuyul は普通は人の眼には見えないが，小さな子供の姿をしているという。眼に見えないのにどうして姿がわかるのか，などと聞くのは野暮である。tuyul は人に飼われており，その主人の命令で他人の家にこっそり忍び込み，現金や貴金属，食糧などを盗んでくる。少しずつ取ってくるので，入られた側はなかなか盗まれたことに気付かない。

tuyul を操る主人は，ランプかろうそくの炎に注意していなければならない。炎が揺れると tuyul は危険，つまり捕まりかけているのだ。その時には，炎を吹き消す。そうすれば tuyul の姿も消えて，捕まる心配がなくなる。どうも tuyul は「仕事中」には姿を現わすらしい。その性質を利用して，予防策を立てることもできるという。金庫や宝石箱の中に小さな鏡を付けておく。そうすれば，tuyul は鏡に写った自分の姿を見て，驚いて逃げて行く。tuyul は容姿に自信がないらしい。金細工店の壁面が全部鏡になっているのも，tuyul を防ぐためだ，とS氏は解釈した。

その tuyul とやらに，一度御目にかかりたいと思ったのだが，見たい時に出てくれないのが roh alus の常，そのうち村の中に住み込んで調査を始めてしまった。ある時，隣村のA氏を訪れたが，ここでも同じような tuyul の話を聞いた。金持は大抵 tuyul を飼っているのだそうだ。「ところで，このあたりに tuyul を飼ってる人はいるのかい」と尋ねると，A氏は意味あり気に笑った。「ああ，いるよ。お前さんの住んでる村のだなあ，お前さんが厄介になってる家だよ。そう，Tが tuyul を飼ってるのさ。」確かに，T氏はこの近辺では有数の金持だ。にもかかわらず，いや，そのせいか，村での評判は余り芳しくない。しかし，tuyul と一つ敷地に住んでいようとは……。その割には盗まれたものはない。カネ目の物がないので，tuyul に馬鹿にされたのだろうか……。

ある日，二日ほど留守をして村に戻ると，部屋の中が散らかっている。ちゃんと鍵をかけておいたのに，どうしたことだろう。これが tuyul の仕業なのだろうか。いや，待てよ，板壁に黒い足跡が付いている。壁の上の小さなすき間から侵入したらしい。tuyul にしては，やることが alus ではない。なくなったのも下らない物ばかりだ。もしや，と思って，外で遊んでいた大家の息子をとっつかまえて，やんわりと問い正した。「留守中に誰か忍び込んだようだ。ナイフと懐中電灯がなくなったんだが，誰の仕業か知らないかい」と，まず聞いてみた。まだ小学生なのに，親同様，村での評判が良くない息子は，「知らないよ」と真剣な顔をして答えた。「じゃあ tuyul かなあ。でも一応，警官のHさんを呼んできて見てもらおう。」彼は何も答えない。「人が見てなくてもね，神様はちゃんと見てるのよ。そして悪い人には罰を下すものなのよ」と，妻が，信じてもいないのに，白々しく諭すように付け加えた。このゆさぶりが効いたのか，息子は，とうとう「どこかに落ちてないか探してくる」と言って，飛び出して行った。

母親が様子を伺いに来た。「近頃はワラを取りに遠方から来てるのが多くて物騒なんだよ。きっと犯人は他所者さ。ウチの子に限って，悪いことなどするもんか」と自信あり気だ。そうこうするうちに，「庭の隅に落ちてたよ。なくなったのこれでしょう」と「拾い物」を手に息子が戻ってきた。決して非を認めないが，これがジャワ流の謝り方だ。母親は一言も言わず，プイと家の中に逃げ込んでしまった。

せっかく tuyul かと思ったのに，やはり roh kasar の tuyul だった。roh alus の tuyul には，結局会えずじまいだった。